
2

章

授業の計画にあたって

いま求められている資質・能力を生徒に身に付けさせるために、どのような授業をすれば良いのでしょうか。また、そのための計画は、どのように立てれば良いのでしょうか。

2章では、授業の計画について説明します。

1 「生徒に身に付けさせたい力」とは

教科・科目の目標と内容を押さえる

授業を計画するとき、まず学習指導要領を確認します。授業は、学習指導要領に書かれた、各教科・科目の「目標」と「内容」に基づかなければなりません。それが「生徒に身に付けさせたい力」の基盤です。各教科・科目の「目標」「内容」は、育成すべき資質・能力の「三つの柱」を踏まえたものになっています。 → 序章

☆育成すべき資質・能力の「三つの柱」

- 何を理解しているか、何ができるか（知識及び技能）
- 理解していることやできることをどう使うか（思考力、判断力、表現力等）
- どのように社会や世界と関わり、より良い人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

学校教育目標とスクール・ポリシーを押さえる

教員一人ひとりが生徒に対して「こうなってほしい」「こういう力をつけてほしい」という願いを持つことは、とても重要なことです。しかし、授業は、個人ではなく学校が行うものです。学校が定めている「学校教育目標」とこれに基づき各学校で定めたスクール・ポリシーなどを基に「育てたい生徒像」を確認しましょう。その実現のために、教科・科目として、どのような力を身に付けさせれば良いかを考えていくという視点が欠かせません。

1章－2 に詳しい説明がありますので、確認してください。

生徒の実態を把握する

以上のような要素を基にして定めた目標に対し、今、目の前の生徒がどのような状況にあるのかを分析しましょう。何が足りないのか、何が得意で何が不得意なのか。目標と生徒の実態を重ね合わせることで、「生徒に身に付けさせたい力」の具体的なイメージが、おのずと立ち現れてくるでしょう。

生徒理解が出発点です！

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

「身に付けさせたい力」は、生徒一人ひとりの状況に合わせて育んでいくものです。日頃から、生徒の学習全般の傾向、理解・表現の特徴、感じ方などの情報を蓄積するようにしましょう。さらに、既習事項の習熟度、特性やつまずきのポイントなどを把握することが、個に応じた適切な支援につながります。



「年間指導計画」

「年間指導計画」は教材や学習活動の配列ではなく、年間を通して教科・科目の目標の実現を目指していくためのものです。学校の教育目標や生徒の発達段階や学習状況を考慮するとともに、季節や学校行事等と教科との関連も見通して計画する必要があります。

「指導と評価の計画」を作成し、指導の時期や指導する順番を考えることが、「年間指導計画」を立てる際に大切になります。

→ 2章－4

「年間指導計画」ここに注意！

単位の修得が認められるためには、1年間（分割履修の場合は2年間）の中で、当該科目の全ての指導事項を取り扱う必要があります。一つの指導事項を複数回取り上げても構いませんが、そのために扱わない指導事項が出ないようにしましょう。

「年間指導計画」については、所属校によって、校内で統一した書式で作成している場合と、個人に委ねられている場合とがあります。どちらの場合にせよ、大切なのは、場当たりの授業を行うことがないようにすることが重要です。他の教科担当の教員から状況を聞き取るなどして、俯瞰的な視点で指導の計画を立てましょう。



探究の道しるべ

- ① 所属校が学校教育目標やスクール・ポリシー等に「育成したい資質・能力」としてどのようなものを挙げているか調べましょう。
- ② ①に対して、生徒たちがどの程度目標に近づけているか確認しましょう。
- ③ ①の目標を実現させるために、②の段階にいる生徒たちにどのような活動を通した働きかけが有効か、考えましょう。
- ④ ③で考えた働きかけを取り入れた授業づくりを考えましょう。
単元の導入・展開・まとめの各段階において、どのような働きかけができるか、具体的な活動を当てはめながら単元全体の学習の流れを考えましょう。

授業づくり、学習評価に関する参考資料

- 「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校）」
平成24年7月、平成25年3月 国立教育政策研究所
- 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（高等学校）」
令和3年8月 国立教育政策研究所
- ※「学習評価の手引き」 令和4年3月 神奈川県教育委員会
- ※「指導と評価の一体化の視点からの授業づくり」 令和4年9月 神奈川県教育委員会

※印の資料は神奈川県教育委員会ネットワークシステムポータルサイト からダウンロードできます（内部サイトページ→教育情報共有システム）。→その他の資料はP122へ

2 単元（題材）の目標の考え方

☆「単元（題材）」とは

単元とは、各教科の内容をある程度のまとまりで捉えたものです。学習指導要領の内容から、まとまりを考えると良いでしょう。

また、教科・科目によっては「単元」ではなく「題材」として内容のまとまりを捉えることもあります。

単元（題材）の目標を設定する

前項で述べたとおり、年間指導計画は、「生徒に身に付けさせたい力」をどのような学習の流れで身に付けさせていくかという計画です。ですから、単元（題材）の目標は、年間の流れを意識した上で、当該の単元（題材）で身に付けさせたい力を示すものです。

単元（題材）の目標を立てる際に、教員の思いや願いのみをつづっていませんか。それも大切にすべきことなのですが、まず、学習指導要領を確認することが重要です。現在、定められている評価は「目標に準拠した評価」ですので、その評価の大元となる目標を設定することが必須条件となります。そして、目標設定の基本は、まずは学習指導要領の「内容」です。我々教員は、この内容を漏れなく指導する必要があります。

☆「目標に準拠した評価」とは

学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らしてその実現状況を捉えるものです。



単元（題材）の目標の焦点化

単元（題材）の目標とは、その単元（題材）を通して生徒たちにどのような力を身に付けさせたいかを示すものです。教員として生徒に身に付けさせたい力は、たくさんあると思います。しかし、効果的な指導のためには、一つの単元（題材）にあれもこれも詰め込むのではなく、一つの単元（題材）の目標は焦点化しましょう。それを1年間積み重ねることで、最終的に教科・科目の目標を実現させるという視点をもちましょう。

年間指導計画を立てる時点で、カリキュラム・マネジメントの視点を持ち、いつ頃・何を・どのように指導するかについて、教科チーム内で情報共有しておきましょう。生徒の入学から卒業まで、系統だった指導計画を立てることにつながります。

生徒に応じた学習支援を

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

生徒の学習の進度は、皆同じではありません。生徒が目標をどこまで達成できるかは一人ひとり異なります。

令和3年中教審答申の「個別最適な学び」でも、「教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現する」「子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行う」という「指導の個別化」が求められています。一人ひとりにあった無理のない学習支援を考えましょう。

単元（題材）の目標の設定例

地理歴史（地理総合）

「B 国際理解と国際協力（1）生活文化の多様性と国際理解」

〈学習指導要領の内容〉

ア 次のような知識を身に付けること

- (ア) 世界の人々の特色ある生活文化を基に、人々の生活文化が地理的環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性をもつことや、地理的環境の変化によって変容することなどについて理解すること。
- (イ) 世界の人々の特色ある生活文化を基に、自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性などについて理解すること。

イ 次のような思考力・判断力・表現力等を身に付けること

- (ア) 世界の人々の生活文化について、その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、主題を設定し、多様性や変容の要因などを多面的・多角的に考察し、表現すること。



■単元名

「生活文化の多様性と国際理解」

■単元の目標

- ・世界の人々の特色ある生活文化を基に、人々の生活文化が、地形、気候などの自然環境や、歴史的背景や経済発展などの社会環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性を持つことや、それらの地理的環境の変化によって変容することなどについて理解する。
- ・世界の人々の特色ある生活文化を基に、自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性などについて理解する。
- ・世界の人々の生活文化について、その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、「地理的環境を踏まえた生活文化の理解と尊重」などの主題を設定し、「多様な生活文化に配慮して、世界の人々が共存するためにはどのような工夫が必要なのだろうか」などを、多面的・多角的に考察し、表現する。
- ・生活文化の多様性と国際理解について、より良い社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追求しようとする態度を養う。

参考：「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する

参考資料（高等学校）地理歴史」令和3年8月 国立教育政策研究所



探究の道しるべ

- ① 自身が担当している教科・科目を一つ取り上げ、学習指導要領の内容を確認しましょう。
- ② ①に対して、ここまで授業で取り扱ってきた内容に印をつけましょう。
- ③ まだ取り扱っていない内容について、左の例を参考にして
 - ・取り扱う時期
 - ・単元名
 - ・単元の目標を考えましょう。

*左ページに記載の通り、年間を通じて学習指導要領にある全ての内容を指導する必要があります。このような点検作業を実施する機会を年に数回設けておき、調整を図りましょう。

単元（題材）による授業構想

「単元（題材）による授業構想」とは、学習指導要領にある各教科・科目の目標や内容を実現するために、ある程度のまとまりを単元として授業を考えることです。各教科・科目における目標の実現は、1単位時間の授業で達成できるものではありませんから、内容のまとまりを単元として、単元（題材）を通して身に付けさせたい力を構想することが必要です。

3 評価規準を設定する

☆「学習評価」とは

→ 4章－1

☆「観点別学習状況の評価」

生徒の学習状況を見取るにあたり、各観点に対する評価規準を考え、それに対する達成状況の評価します。これが観点別学習状況の評価です。

平成30年告示の学習指導要領では、各教科を通じて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理されました。

評価規準とは

学習評価を適切に実施するためには、各教科・科目の目標だけでなく、学習指導のねらいが明確になっていること、学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現された姿とはどのような状態をさすかを具体的に想定することが必要です。このような状況を具体的に示したものを評価規準といいます。各学校において、観点ごとの「おおむね満足できる」状況（B）を評価規準として設定します。次ページの評価規準の例を参照してください。

また、ねらいがはっきりしていることは、教員だけでなく生徒にとっても必要なことです。自分たちが行っている学習活動が、どのような意味をもつのかを知ること、授業への意欲は高まり、内容の理解が深まると考えられます。

「観点別学習状況の評価」のポイント

知識・技能

各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかを評価します。

思考・判断・表現

各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価します。ここでの表現とは、思考・判断した過程や結果を言語活動（2章－10）等を通して、生徒がどのように表出しているかを内容としており、いわゆる「表現力」の良し悪しを評価するものではないことに注意が必要です。

主体的に学習に取り組む態度 → 4章－3

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価します。

参考：「学習評価の在り方ハンドブック（高等学校編）」令和元年6月 国立教育政策研究所

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

生徒の良さを引き出し、可能性を伸ばす評価

教員が、何のために、どのように活動をすれば良いか、分かりやすく提示することで、生徒が活躍できそうな場面やチャレンジできる場面を意識することができます。

生徒が主体的・意欲的に参加できるように、発達段階や認知特性に応じた評価規準を踏まえ、段階的な学習活動を考えるなどして、次の指導につなげていきましょう。

評価規準は誰がどのように設定するのか

☆詳しい作成手順は

「内容のまとまりごとの評価規準」作成の手順については、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所 令和3年8月）に記載があります。

評価規準はどのように設定すれば良いのでしょうか。基本となるものは、学習指導要領の「目標」「内容」です。高等学校では様々な課程、教科・科目があり、学校ごとに評価規準を設定することになっています。学校が掲げる「育てたい生徒像」の実現のために、学習指導要領を踏まえ、教科として何をしなくてはならないのか、さらに生徒の実情や扱う教材等に応じて、観点ごとに評価規準を設定しましょう。

また、評価規準の設定は、個人ではなく、同じ教科・科目の教員同士で内容をよく相談することが必要です。これは評価の妥当性と信頼性を高めるとともに、組織的な授業改善にもつながります。

評価規準の例

例) 化学基礎 単元名 物質質量と化学反応式（観点：思考・判断・表現）
ねらい 「炭酸水素ナトリウムの熱分解の実験を行い、化学反応式の係数の比は物質質量の比に関係していることを見いだして表現する」

A	具体的な実験結果を基に、化学反応式の係数の比は物質質量の比に関係していることを表現している
B	化学反応式の係数の比は物質質量の比に関係していることを表現している（評価規準）
C	「B」を満たしていない

観点別学習状況の評価規準を表しています。

評価規準は、全ての生徒が身に付けるべき資質・能力を観点ごとに「おおむね満足できる」状況（B）として設定するものです。

その他「努力を要する」状況を（C）、「十分満足できる」状況を（A）で表しています。

（C）と判断した生徒には何らかの手立てが必要になります。

指導と評価の一体化

評価規準を設定し授業を実施するということは、教員が自らの指導について振り返ることにも役立ちます。もし、生徒の学習の実現状況が良くない場合は、その原因を生徒のみに求めるのではなく、目標の実現のために効果的な指導がなされたのかどうかを省みる必要があります。

指導と評価とは別物でなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという指導にいかす評価を充実させます。それが「指導と評価の一体化」なのです。

評価とは、定期試験（ペーパーテスト）の得点や指導要録の評定付けとイコールではありません。指導の工夫・改善を進めるきっかけとしての視点をしっかりと持ちましょう。 → 4章－6～8

4 「指導と評価の計画」を立てる

単元（題材）ごとの計画を考える

授業計画を立てるとき1単位時間ごとに考えていくのではなく、単元（題材）というまとまりで考えて、目標（ねらい）を実現していきます。なぜならば、単元（題材）によって、そのねらい（身に付けさせたい力）は異なるからです。

評価規準を考える

始めに、単元（題材）の評価規準を観点別に設定します。次に、ねらいをどのように実現していくか、生徒が学習を積み重ねていく学習の流れを考え、具体的な評価規準を設定し、単元（題材）の中に適切に配置することが大切です。

学習活動を考える

設定した目標（ねらい）を実現するための学習活動を考えます。単元（題材）全体の流れの中で、それぞれの授業がどのような位置付けにあるべきか、個々の授業のつながりを踏まえて考える必要があります。教科や単元（題材）によっては、評価規準と学習活動の配置と併せて評価の方法も同時に考えていく必要があります。

☆目標に準拠した評価

→ 2章－2

☆様々な学習活動の評価について

言語活動、観察・実験、問題解決的な学習などの学習活動の評価する際、その活動ができているかを表面的に評価するのではなく、各教科等で育成すべき能力等が身に付いているかどうかを評価しましょう。間違えやすいので、特に気を付けたい点です。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

多様な生徒の実態に応じた単元（題材）による授業構想

生徒の興味・関心を引き出す活動を展開するために、次のような内容を取り入れてみましょう。

- ①生活につながる内容
- ②経験や既習内容がいかせる内容
- ③探究心を引き出す内容
- ④驚き・発見・疑問が生まれる内容 など

→ 1章－4



単元（題材）の指導と評価の計画

「単元（題材）の指導と評価の計画」を立てるということは、生徒の学びの過程をデザインすることです。

参考：「神奈川県立高等学校等 学習評価の手引き」 令和4年3月 神奈川県教育委員会

単元（題材）の指導と評価の計画		教科名		科目名	
1. 単元名：					
2. 単元（題材）の目標		手順① 学習指導要領に基づき、単元の目標（ねらい）を観点別に設定する。			
・知識及び技能					
・思考力、判断力、表現力等					
・学びに向かう力、人間性等					
3. 単元（題材）の評価規準		手順② 目標が実現できた状況を想定し、単元（題材）の具体的な評価規準を設定する。			
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度			
△△△・・・。	△△△△△・・・。	△△△△△・・・。			
4. 単元の指導と評価の計画（ ）時間扱い		○：「記録に残す評価」			
時	主な学習活動	知	思	態	評価方法
		手順③ 目標を実現するための学習活動を決める。			
		* 手順③④は、相互の整合性を意識して、一体的に計画する。			
	手順④ 単元のどこで、どの観点を、どのような評価資料により見て取るかを計画し、記録を残す評価の観点に「○」を記入する。				
		○			

知：知識・技能 ※職業教育を主とする専門学科においては「知識・技術」 思：思考・判断・表現 態：主体的に学習に取り組む態度

参考資料－2に単元（題材）指導計画の例（「総合的な探究の時間」）があります。

単元（題材）の中で「記録に残す評価」を実施する機会

「単元（題材）の指導と評価の計画」では、「記録に残す評価」（4章－1）を実施する場面を「○」で示します。「記録に残す評価」は、1単位時間の中に全ての観点を盛り込んで実施する必要はありません。授業の展開によっては、「記録に残す評価」を行わない時間もあり得ます。単元（題材）を計画する際には、評価場面は、1単元（題材）の中で、バランス良く（各観点につき必ず一回以上）設定しましょう。

→4章－1・2、参考資料－2

5 「主体的・対話的で深い学び」とは

学びの質の向上のために

学習指導要領には、実現したい生徒の姿として次のように書かれています。

- ・ 学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解する。
- ・ これからの時代に求められる資質・能力を身に付ける。
- ・ 生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにする。

生徒をこうした姿に導くためには、学びの質を高めるための取組が必要となります。「主体的・対話的で深い学び」は、学びの質を向上させるための授業づくりの視点として、学習指導要領に示されているものです。

「主体的・対話的で深い学び」とは

○ 主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

○ 対話的な学び

生徒同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

○ 深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

個別支援が
必要な生徒
への対応を
考えよう

基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得

生徒によっては、基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合があります。そのような場合、個別指導なども取り入れつつ確実な習得を図ることが求められます。ねらいに応じて多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てていくことが重要です。

学び方の具体例

- 主体的な学び
 - ・身近な事例に接し、学ぶことに興味や関心をもつ
 - ・自ら問いを見だし、課題の追究・解決を行う
 - ・キャリア形成に関連付ける
 - ・ゴールのイメージや手順の理解等から、見通しをもって粘り強く取り組む
- 対話的な学び
 - ・生徒同士互いの考えを伝え合いながら、集団としての考えを形成し、協働して物事に取り組む
 - ・教員や地域の人々の実践や考え方から多様性を理解する
 - ・文献、楽譜、その他の資料から先哲の考え方に触れる
- 深い学び
 - ・その教科等の見方・考え方を働かせる
 - ・次の学習や日常生活等における問題発見・解決に活用する

深い学びの鍵となる「見方・考え方」

各教科等の特質に応じた「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方です。

「見方・考え方」は、各教科等を学ぶ意義の中核をなすものであり、とともに、教科等の学習と社会をつなぐものでもあります。授業を通して、生徒が「見方・考え方」を捉え、日々の学習や生活の中で「見方・考え方」を自在に働かせられるようになるよう、授業展開や活動を工夫しましょう。

実践にあたり、留意すること

生徒の実際の状況を踏まえながら、資質・能力を育成するために多様な学習活動を組み合わせることが重要です。

高度な社会課題の解決だけを目指したり、討論や対話のような学習活動を行ったりすることだけが「主体的・対話的で深い学び」ではない点に留意しましょう。

☆陥りがちな「良くない授業」の例

- ・教員の「教える」時間が大半を占め、生徒の考える時間がない授業
- ・発問や説明が不十分で、今何をすべきか生徒に伝わっていない授業
- ・グループ協議等において活動そのものが目的になってしまっている授業
- ・ヒントが多すぎて、考える余地が残されていない授業



☆よくある誤解から

「どこまで取り組みれば深い学びになりますか」と疑問を持たれる方がいます。「深い学び」は難易度（量）を指すのではなく、深めていく方向に向かって行くこと（質）なので、「どこまで」ということはありません。

「主体的・対話的で深い学び」に関する参考資料

- 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成28年12月21日 中央教育審議会
- 『高等学校学習指導要領解説 総則編』平成30年7月
→学習指導要領のダウンロードは、P122へ
- 新しい時代の初等中等教育の在り方について（関係資料）
平成31年4月17日 中央教育審議会
→「新しい……（関係資料）」のダウンロードは、右の二次元コードから



6 学習活動を組み立てる

学習活動とは

学習活動とは、学習目標を実現するために行う活動のことです。活動をする事自体が授業の目標である場合と、その学習活動を通して考えることで授業の目標に到達していく場合とがあります。

授業の計画では、その区別を明確にしておくことが大切です。そして、限られた時間内で、最も効果的な学習活動を選び、組み立てることが重要です。

目標を実現させるための学習活動を選ぶ

各教科・科目の目標を実現するためには、効果的な活動を選ぶことが大切です。

そして、学習活動を組み立てる際には、クラス全体で行うのか、少人数のグループで行うのか、個人で行うのかといった学習形態も合わせて考えましょう。



言語活動の充実

学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等の育成のため、各教科・科目での言語活動の充実が求められています。

その活動には、生徒が自分の考えをまとめる活動、自分の考えを言葉を使って表現する活動、考えを交流する活動、他人の意見を聞き自分の考えを深める活動（記録・要約・説明・論述・討論・解説・創作・批評・編集等）があります。

詳しくは2章－10に説明がありますので、確認しましょう。

個別支援が
必要な生徒
への対応を
考えよう

主体的な参加を促すために

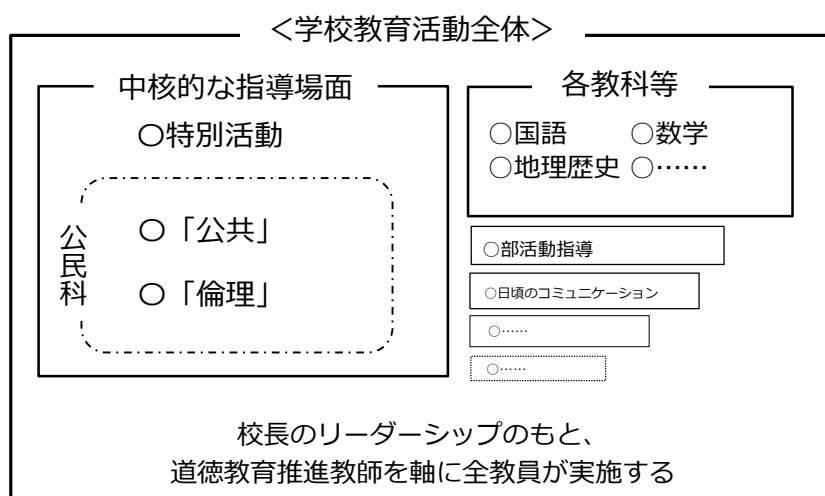
教員が提示した問いに対して、生徒同士協議をしながら解決方法を探ります。分からないところも、生徒がグループをつくり相談して解決します。生徒同士が交流することで、それぞれの生徒の知的好奇心や探究心が刺激されます。



コラム＜道德教育の実施＞

高等学校では、教科としての道德科は設置せず、学校教育活動全体で道德教育を行います。学習指導要領解説総則編において、道德教育は「生徒がよりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標としており、生徒一人一人が将来に対する夢や希望、自らの人生や未来を拓いていく力を育む源となるものでなければならない」と述べられています。道德性は「自己を見つめる活動」と「多面的・多角的に考える活動」を、学習を通して日常的に繰り返し行うことで養われるとされています。

高等学校の道德教育では、中核的な指導の場面として「特別活動」と「公民科（「公共」「倫理」）」を充て、その他の教科・科目では、それぞれの内容や目標、「道德教育に関する配慮事項」に基づいて設定し、「道德教育の全体計画」を作成します。校長がリーダーシップを取り、道德教育推進教師を中心として全教員がその計画を実施することが求められます。



「道德教育に関する配慮事項」については学習指導要領第1章「総則」の第7款に、各教科の目標と道德との関連については、具体的な例が学習指導要領解説総則編の第8章に記されていますので参照してください。

☆道德的諸価値とは

- A 主として自分自身に関すること
 - B 主として人との関わりに関すること
 - C 主として集団や社会との関わりに関すること
 - D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
- の四つです。

小学校・中学校の「特別の教科 道德」では生徒が主体的に道德性を養うことができるよう、22の内容項目を上記の四つの視点（道德的諸価値）に分類し、道德科の学習を組み立てます。



道德教育の参考資料

- 『高等学校学習指導要領解説 総則編』「第8章 道德教育推進上の配慮事項」
平成30年7月 文部科学省
- 『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』
平成29年7月 文部科学省 →各種学習指導要領のダウンロードはP122へ
- 「道德教育について」
平成28年5月27日 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会
考える道德への転換に向けたワーキンググループ資料



7 学習目標に合った教材

☆教材と教具の違い

教材とは、教える内容のことをいいますが、教えるための題材や道具を含む場合があります。

教具は教えるための道具という意味合いが強いです。教材の方がより広い範囲を指し示していることが多いといえます。

例えば、理科で電圧を計測する実験をするときの電圧計は、電圧を計測する方法を理解させるための教材ですが、計測するための道具として示す電圧計は教具になります。

特に必要のない場合は区別せず、教材・教具として表しています。

教材とは

教材とは、学習目標を実現させる材料、すなわち生徒に理解させたい知識や概念、習得させたいスキルなど生徒に身に付けさせたい力を実現化させるための具体的な材料のことです。身に付けさせたい力が同じであったとしても、学習者が異なれば、学習者に合った方法や題材、道具等の具体的な材料が異なる場合があります。

学習目標に合った教材を工夫することが必要です。

生徒の実態を把握する

生徒の予備知識や興味や関心の程度などのレディネスを把握して、効果的な教材を考えましょう。また、生徒の学ぶ姿についても予測しておきましょう。

教材を評価する

工夫され、入念に計画された教材であっても、実際に授業を行うと、教員の意図と生徒の感じ方が全く同じであるとは限りません。教材の効果を必ず確認しましょう。

まずは、生徒に身に付けさせたい力が育成できたかどうかを評価します。そして、そのための学習活動を充実させる教材であったかどうかを評価します。

また、授業中の生徒からの質問内容、授業後に行うアンケートや、生徒との会話からの感想の聞き取りなども評価の方法として用いることが考えられます。

個別支援が 必要な生徒 への対応を 考えよう

認知の特性に応じた教材

生徒の認知の特性に合った教材を用意しましょう。視覚（文字、イラスト、写真、映像）、聴覚（言葉）など、一人ひとりの生徒の認知の特性には違いがあります。

授業では、様々な伝達方法を工夫しましょう。個別に課題を準備する場合は、その生徒の興味や関心に合わせた教材を取り入れましょう。まずは教材に対して、興味をもって向き合えることが何よりも大切です。



教材の工夫の視点

目標の確認

学習目標を十分に把握し確認することが、教材の有効性を判断する基盤となります。

教材の選択

取り扱う教材が、「身に付けさせたい資質・能力」を育むために効果的なものであり、生徒が学ぶ意義を感じられるものか、生徒の関心を高めるものか、時代の要請を受けているものかなどの視点から選びます。

提示の方法

説明する対象を動画で提示すると、動きを含めて説明することができますが、細部にわたりじっくり説明するためには写真の方が良い場合があります。さらに、特徴を説明する際には unnecessary 細部を省略したイラストが効果的である場合もあります。このように、何をどのように伝えるのかによって提示の方法が異なります。

生徒の思考の流れ

例えば、アルカリ金属の一般的な性質について説明してから、Li、Na、K等の個々の性質を説明するのか、個々の元素の性質からアルカリ金属の一般的な性質を導き出すのか、授業の流れは何通りか考えられます。Li、Na、K等の個々の性質について予備知識がなければ、アルカリ金属の一般的な性質を導き出すのは難しいかもしれません。このように、生徒の思考の流れに沿った教材を工夫する必要があります。

期待される効果

選択した教材が、生徒にとってどのような学習効果があるかを予測しましょう。授業を実践したら、どの程度効果があったかを評価する必要があります。そこから、成果と問題点を把握し次の授業に反映させていくことが、授業力の向上につながります。

☆教科書をどのように使うか

よく「教科書で」教えるといいますが、それは「教科書を」教えることが学習目標ではないということです。

教科書は最も身近な教材ですが、大切なのは教材の内容を学ばせることではなく、「身に付けさせたい資質・能力を育むために教材を用いる」ことです。

生徒の具体的な学習活動を想定して、効果的な使い方を工夫してみましょう。

☆コンピュータは万能か

現在の発達した情報通信技術（ICT）では、様々な方法で教材を提示することができます。

しかし、コンピュータの画面で提示するだけが全てとは限りません。

場合によっては、板書や紙に書いたものを提示する方が良いことがあります。

→「ICTを活用した学び」3章-5

「見て、触って、感じられる」教材の活用も有効

教科書に代表されるような活字で書かれた教材以外に、写真や映像、実際の「物」等、「見たり」「触れたり」できる教材を活用することで、生徒は授業内容をより具体的に与えることができるでしょう。

例えば地理や地学の授業において、土地の形状や土地の利用状況をとらえるには衛星写真の利用が有効です。教員の説明に因らず、写真を見て生徒が「何に気付いたか」「何を感じるか」という部分を、大切にしたいものです。

→ 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構
陸域観測技術衛星「だいち」の
衛星写真ギャラリーホームページ



8 ポイントは授業構成

単元（題材）の「導入・展開・まとめ」

毎時間の授業にも、開始から終了に至る流れはありますが、指導計画は、あくまで単元（題材）全体を見通して立てるものです。

「導入・展開・まとめ」を1単位時間の授業で考えるのではなく、学習活動のまとまりごとに設定するものと考えないと良いでしょう。

ただし、はじめにどのような活動をして意欲を喚起しようか、中心となる学習活動は何か、次の時間にどうつなげるかといった1単位時間の授業の構想は必要です。

1 単位時間の構成

1単位時間の授業は、「指導と評価の計画」（2章－4）の中に位置付けられたものです。目標の実現のために、観点別の評価規準を配置して本時の学習の構想を練ります。

1単位時間の授業内容は、ほかの授業内容とつながっています。各時間の授業の位置付けを確認し、どうしたら効果的に生徒が目標を実現できるかを考えながら、それぞれの授業の構成を考える必要があります。

授業構想の四つのポイント

次の要点に沿って1単位時間の流れを構成しましょう。

- ★ 本時で身に付けさせたい力の確認
- ★ 評価の場面と方法を想定
- ★ 生徒が主体的に活動に取り組むための工夫
- ★ 時間配分と山場づくり



個別支援が
必要な生徒
への対応を
考えよう

学習集団にマッチした授業構成を！

話すことが苦手、聞くことが苦手、書くことが苦手、話合いが苦手…どの学級にも特性のある生徒がいます。生徒の特性を把握し、各学級に合った授業構成を考えることが大切です。みんなが授業に参加したい、理解できるようになりたいという気持ちをもっています。

「指導と評価の計画」の中に、「書くことが苦手な生徒には、机間指導の中で書きたい内容に気付かせる」「聞くことが苦手な生徒がいるので発問の内容は板書する」など、生徒に応じた配慮事項を書き加えられるとさらに良いですね。

〈例〉商業 簿記「決算 財務諸表の作成」

《単元の目標》

- ・決算に関する知識、技術などを基盤として、企業会計に関する法規と基準を実務に適用し、適正な財務諸表の作成について、組織の一員としての役割を果たすことができるようにする。

《本時のねらい》（第4時）

- ・作成した財務諸表における課題について他者の考えと比較し、多様な視点を基に自らの考えを表現する。
- ・財務諸表作成について自ら学び、適正な財務諸表の作成に主体的かつ協働的に取り組む。

《本時の流れ》（50分授業）

時間	学習活動	評価規準・評価方法
導入 5分	・決算の流れと財務諸表の意義や内容を貸借対照表と損益計算書の勘定科目を基に再確認する。	
展開 35分	<p>・架空の店舗の精算表を基に、貸借対照表と損益計算書を作成する。</p> <p>・表前時までの学習を基に、正しい表記にさせる。</p> <p>あなたなら財務諸表を基にどのような経営改善案を提案しますか？</p> <p>・架空の店舗の財務諸表を基に経営活動の改善案を考察する。</p> <p>①改善案を貸借対照表から考察し、ワークシートに記入する。（個人）</p> <p>②記入したワークシートを基に、グループで改善案を作成する。</p> <p>・他者の改善案を聞き、自らの考えに生じた変化をワークシートに記入する。</p>	<p>・「単元の目標」や「本時のねらい」を明確にする。</p> <p>→「何のために、何をするか」を生徒に明示する。</p> <p>【思考・判断・表現】作成した財務諸表における課題について他者の考えと比較し、多様な視点から考えを表現している。</p> <p>評価方法：ワークシート</p>
	<p>・改善案が浮かばなさそうな場合は、貸借対照表が店舗の財政状態を表し、損益計算書が店舗の経営成績を表していることを思い起こさせ、着眼点を考えさせる。</p> <p>・記入にあたっては、自らの着眼点と他者の着眼点を比較させ、新たな視点や改善案を導く。</p>	
まとめ 10分	<p>・改善案を基に決算のもたらす意義を改めて考察し、ワークシートに記入する。</p> <p>・記入ならぬ意義の重</p>	<p>・「展開」に当たる活動は、本時のゴール（まとめ）につながるように設計する。</p> <p>この例では、</p> <p>展開 「考え」をもつ</p> <p>「考え」を広げ深める</p> <p>まとめ 「考え」を整理する</p> <p>という流れを意識して、授業が計画されている。</p> <p>【振り返り】授業について自ら学び、作成に主体的に取り組もうとしている。</p> <p>評価方法：ワークシート</p>

「令和3年度 高等学校教育課程研究会研究報告 第1集 商業」神奈川県立総合教育センター より（一部改編）

50分授業以外の授業構成 （例）90分授業の場合

90分間、生徒の興味や関心、集中力などを持続させるのは難しいものです。そこで、授業の構成の工夫が必要になります。例えば、「書く」「話し合う」「読む」といった活動を効果的に取り入れます。その際には、それぞれの活動が生徒の学びの深まりにつながるものとなるよう心掛けましょう。

また、90分という時間をいかし、じっくりと考えさせたり、十分協議させたりすることができます。そのための資料の準備や展開の工夫などを考えることも大切です。

なお、90分以外の授業についても、その特長をいかした授業構成が求められます。

9 学習活動にはふさわしい学習形態がある

☆目的に応じた学習の手法

学習目標に合った学習活動を行うためには、学習形態だけでなく、学習の手法も考えなければなりません。

(例)

- ・ブレインストーミング
自分の考えやひらめき、アイデアを自由に出し合い、そこから想像と連想を働かせて多くのアイデアを生み出す発散思考の代表的な手法です。グループで行うと、協議しやすく意見もまとまりやすいので効果的です。
- ・ロールプレイング
場面を設定して役割を演じる体験活動を通して、気付きを得る活動です。友達の演技を見て気付いたことや、自分自身が役割を演じながら気付いたことなどから、自分の考えを深めます。

目標に合った学習活動

一斉講義型の授業だけでは、「主体的・対話的で深い学び」の実践にはなりません。しかし、様々な活動をさせることだけが目的になってしまうと、「活動あって学びなし」・・・ということにもなりかねません。学習目標に合った学習形態や学習活動を工夫して、生徒の深い学びにつながる授業づくりを心掛けましょう。

学習活動に合った学習形態

学習活動を進めるときには、学習活動のねらいを実現するためにふさわしい学習形態を考えることが大切です。

・自分の考えをまとめる活動・・・個別学習

資料を読んで調べたり、根気強く作業したりしながら、自分の考えをまとめる学習活動です。考えをまとめる際にかく活動を取り入れると、より明確になりますし、あとで振り返ったときに自分の考えの変化に気付きます。

・考えを交流する活動・・・グループ学習

個々の考えを交流し、グループの考えをまとめる活動です。意見をまとめる活動を通して、互いの考えを認め合い、自分の考えを深めることにつながります。

ペア学習

話合いが苦手な生徒に有効な活動です。はじめに話合いのテーマを確認し、自分の考えをまとめさせます。次に、時間を決めて一人が話します。話し手と聞き手は教員の合図で交代します。互いの考えを聞き合った後、最後に考えを交流します。

グループ学習のあと、再び自分の考えをまとめる時間を設け、思考の深まりや広がりを促すと良いでしょう。

個別支援が必要な生徒への対応を考えよう

学習に取り組みやすいような配慮を

座席の位置を配慮することで、落ち着いて授業に参加できることがあります。前を向く講義型の座席であれば、周囲が気になる生徒は、前方に座れば他の生徒の動きが目に入りません。そのため、教室前方の座席を指定する方が落ち着いて過ごせるといわれています。

後ろからの視線が不安で欠席がちであった生徒に対して、全ての教科で座席をできるだけ後方にする配慮をしたところ、少しずつ学校に登校できるようになったケースもあります。 →1章－8～11

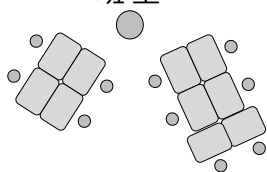
学習形態の違いによる学習の特徴

ペア型



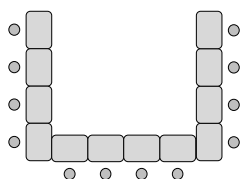
- ・集団内での活動が苦手な生徒に有効です。
- ・生徒全員が、話したり聞いたりする活動ができる。
- ・気軽に意見交流ができ、自分の考えの確認がしやすい。

班型



- ・班員が知恵を出し合って、話し合うことができる。
- ・手元の教材を互いに見合いながら学習できる。

コの字型



- ・生徒が互いの顔を見ながら学習することができる。
- ・教員は各生徒の座席近くで学習状況を把握できる。

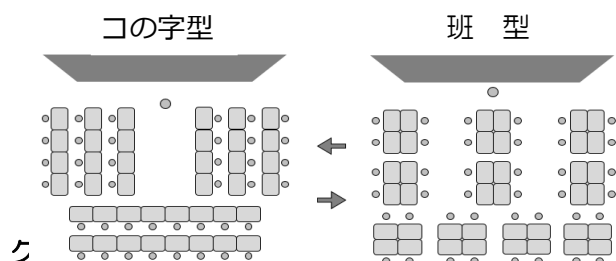
立型グループ活動

模造紙やワークシートを壁に貼って、机や椅子を使わずに、立ったまま議論する。無駄話が減り、スピーディーに話し合いが進んで、議論が深まるという利点がある。

ポスターセッションのように、聞きたいと思う発表者の所へ聞き手が移動し、活発に意見交換をするものもある。

日常的に、次のような「コの字型」に机を配置して授業をしている学校があります。そしてグループ活動を行う際には、授業中の短い時間で机を移動し、「班型」の形態へ変形させます。

机の配置を工夫することで、全体での講義からグループでの意見交流へ、そして全体での協議という学習活動がスムーズに行えます。



☆話し合いの形態と人数

人数にきまりはありませんが、話し合いの目的によってそれに適した人数規模があります。その時間のねらいを明確にした上で、適切な学習形態を選ぶよう、構想しましょう。

(例)

2人

- ・スキルの練習
- ・テスト
- ・確認
- ・インタビュー

3人～4人

- ・意思決定
- ・課題解決
- ・実験

5人～6人

- ・情報交換
- ・アイデアの共有
- ・発表

「話し合い活動を通した生徒同士の学び合い」の良さ

話し合い活動を通して、新しい内容や考えが見つかる、思いもしなかった結論が出る、生徒たちの考えが変わる、新しい疑問が出てくる等の効果が考えられます。ただし、話し合い活動を行う際には、何をねらいとするのか、はじめに決めてから取り組みましょう。そうすることにより、話し合い活動を通した生徒同士の学び合いは、生徒にとって新たな気づきや学びの多い活動といえるでしょう。

10 言語活動を充実させる

☆PISA調査とは

経済協力開発機構（OECD）による国際的な生徒の学習到達度調査で、実生活のさまざまな場面で直面する課題に知識や技能をどの程度活用できるかを測ることを目的としています。

対象は義務教育終了段階にある15歳の生徒で、読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーの3分野について調査を実施します。

2022年の調査には、81か国・地域の約69万人が参加しました（日本の参加者は約6,000人）。

国立教育政策研究所
OECD生徒の学習到達度
調査（PISA）



言語活動の充実が求められる背景

令和5年12月、2022年に行ったPISA調査（PISA2022）の結果が公表されました。日本は、全ての分野で前回調査（2018年）と比べて平均点が上昇していましたが、これは「主体的・対話的で深い学び」を目指す学習指導要領を踏まえた授業改善が進んだこと、学校におけるICT環境の整備が進んだことなどの様々な要因によるものだと分析されています。

高等学校でも、旧学習指導要領より、一人ひとりの生きる力を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むために、言語活動の充実を図ってきました。

引き続き現行の学習指導要領においても、より一層の言語活動の充実を図り、学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠であるとされています。

各教科等における言語活動の充実

国語科においては、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させたり、言葉の美しさやリズムを体感させたりするとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動を行う能力を身に付けます。

各教科等においては、国語科で身に付けた能力を基本に、それぞれの教科等の目標を実現する手立てとして、言語の役割を踏まえて、言語活動を充実させる必要があります。



個別支援が
必要な生徒
への対応を
考えよう

「話す」ための「書く」支援、「書く」ための「話す」支援

自分の考えや意見を述べたり作文に書いたりすることが苦手な生徒がいます。うまく言えない生徒には、頭に浮かんだことをメモに取らせ、それを見て話させる。うまく書けない生徒には、指導者が言いたいことを聞きとり整理するなど「話す」ためには「書く」活動を支援し、「書く」ためには「話す」活動の支援をすることがそれぞれ有効です。

「思考力、判断力、表現力等」の育成と 言語活動の充実

「思考力、判断力、表現力等」とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力のことです。次に示す地理歴史科、公民科の例を参考に、学習過程に応じて効果的に言語活動を取り入れましょう。

地理歴史科、公民科における例

課題把握	動機付け	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習課題を設定する <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的事象等を知る ・ 課題意識を醸成する ・ 気付きや疑問を出し合う ・ 学習課題を設定する
	方向付け	<ul style="list-style-type: none"> ● 課題解決の見通しを持つ <ul style="list-style-type: none"> ・ 予想や仮説を立てる ・ 調査方法、追究方法を吟味する ・ 学習計画を立てる
課題追究	情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ● 予想や仮説の検証に向けて調べる <ul style="list-style-type: none"> ・ 学校外での観察や調査などを通して調べる ・ 様々な種類の資料を活用して調べる ・ 他の生徒と情報を交換する
	考察・構想	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連性を考察する <ul style="list-style-type: none"> ・ 多面的・多角的に考察する ・ 話し合う（討論等） ● 社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する <ul style="list-style-type: none"> ・ 複数の立場や意見を踏まえて解決に向けて選択・判断する
課題解決	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ● 考察したことや構想したことをまとめる <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習課題を振り返って結論をまとめる ・ 結論について他の生徒と話し合う ・ 学習課題についてレポートなどにまとめる
	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習を振り返って考察する <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の調べ方や学び方、結果を振り返る ・ 学習成果を学校外の他者に伝える ・ 新たな問い（課題）を見出したり追究したりする
新たな課題		

中央教育審議会 平成28年12月「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別添資料」より抜粋

☆言語活動の充実を図るための視点

神奈川県立総合教育センター研究成果「＜高等学校＞言語活動の充実を図る実践事例集」には、次の三つの視点が示されています。

- (1) 各教科・各単元の指導計画において、言語活動を明確に位置付ける
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成するための指導と学習活動の工夫をする
- (3) 効果的な学習形態を工夫する

☆言語活動と情報活用能力の関係

情報教育が目指している情報活用能力を育むことは、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、発表、記録、要約、報告といった、知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるものです。

情報活用能力についての解説は、参考資料－3に記載がありますので、確認しておきましょう。

神奈川県立総合教育センター「＜高等学校＞言語活動の充実を図る実践事例集」より

「思考力、判断力、表現力等」を育成するための指導と学習活動の工夫について、「考えをもつ」、「考えを広げる」及び「考えを深める」の三つの視点で整理しました。

- 「考えをもつ」
- 根拠や理由を考えさせる・・・「考えの根拠は何か」と問い、単なる感想でなく、まとまった考えを持たせる。
 - 比較させる・・・対象となるものを注意深く観察する必然性が生じ、共通点等を見いださせる。
 - 考えを記述させる・・・記述させることで考えを明確にさせる。
- 「考えを広げる」
- 説明させる場面を設ける・・・他の生徒の考えを聞くことで、新しい見方や視点に気付かせる。
- 「考えを深める」
- 考えを振り返らせる・・・自らの考えが深まったことを実感させる。新たな気付きを促す。
 - 計画的・継続的に取り組ませる・・・学習の意義や有用性を実感させ、より深く考える力を身に付けさせる。

2章 学びの記録

- 1 本章を読んで感じたことや実践したいことをまとめましょう

- 2 本章の内容を意識しながら他の教員の授業を参観し、気付いた点を挙げましょう

- 3 他の教員からの助言のうち、本章の内容に関わる事柄をまとめましょう

- 4 本章の内容を授業に反映させるために改善すべき事柄を、具体的に挙げましょう